

社会へ関心 新聞を窓口

本別町立仙美里中学校 乙戸 貴宏

1. はじめに

全校生徒27名の仙美里中学校に赴任して2年目を過ぎようとしているが、以前勤務していた都市部の学校と比べて外部的な刺激が少なく、休み時間、放課後の会話が極端に少ないことが、大変気になっていた。

また、国内外における時事問題、事件・事故、青少年に関わる非行行為など自分と関わりの薄いと思われることについて興味・関心を持ちにくく、そこから学はなければいけない関係性を探求する力が不足している。中学生としての常識や自立していくための社会性を学ぶ機会が都市部と比べて極端に少ないと感じていた。学校と家庭のみが生徒の世界観なのである。

そこで、実態を把握するために生徒に学校生活の休み時間・放課後（部活動までの時間）と家庭生活の会話の内容のアンケートをとったところ、以下のような結果になった。

（表1）学校生活、家庭生活での会話内容（平成19年4月実施）

学年	学校生活（上位3位まで）	家庭生活（上位3位まで）
1	1. ゲーム 2. CD 3. 雑談	1. 話さない 2. TV番組 3. 学校
2	1. 友だち 2. ゲーム 3. TV番組	1. 学校 2. 話さない 3. TV番組
3	1. マンガ 2. TV番組 3. 思い出	1. 勉強 2. 生活習慣 3. TV番組

アンケート後、個別に調査したところ、会話は特定の人に限られ、休み時間毎の会話には変化がなく、登校時の教室の中に会話が一言もない学年もあった。

さらに、学校生活と家庭生活の中で新聞記事や昨今のニュースについて会話があるかという問いに対しては、ほとんどの生徒が話すことは無いに近いということが分かった。

このアンケートからは読み取れることは、幼少から中学生になるまで人間関係が変わらず、変化の無い毎日が会話の希薄さにつながっているように感じる。このような少人数の学校・学級でさえ特定の友人しか話さない現状がある。

この実態を打破するためのきっかけとして、わたしは新聞を活用しそれが「社会性」を身につける大きな教育効果を上げるものだと信じ実践を行っているところである。今回の発表では、新聞を活用し、社会的な意識を持たせるまでの過程であり、導入・展開・まとめに例えると、導入・展開までの歩みを報告させていただきたい。

2. 取り組みの概要

（1）教師の意識

わたしの勤務している本別町立仙美里中学校はNIE実践校に指定されているわけでもなく「新聞」に対する、教師側の意識もさほど高いものではなかった。NIEの推進にあたって教師一人一人が意識を変化させ、学級、学校全体で活動しなければ独りよがりになってしまうであろう。そこで、実践を始めるにあたって、教師がどう考えているのか実態を把握することにした。

(表2) 新聞に関する教員向けアンケート (任意)

新聞を購入	いる 80% いない 20%
読んでいるか	読む 50% 時々 30% ない 20%
新聞を使った授業	ある 20% ない 80%
生徒が新聞を読む	必要 90% よく分からない 10%
自由意見	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞によってはただの情報誌 ・同じ記事でも視点の違いから論点が変わる ・テレビ、インターネットで充分 ・意識が低い教師には無理 ・記者の力量に差がある

この結果からは、わたしの勤務している中学校にも新聞の効果を高く評価している教師がおり連携を取りながら、実践を行うことが可能であることが分かった。しかし、大多数の教師が新聞に対する意識に良いイメージばかりを持っているわけではなく、現段階で学校全体としての取り組みが難しいと考える。その反面、新聞を読むことは生徒には必要だと考えていることもあり、教師自らが新聞をしっかり読み、生徒へ正しい情報を提供するためのスキルを高め、分析するだけの気持ちを高めていかなければならない。まずは、わたし自身が生徒とともに学ぶ姿勢を示し、そこで、生徒の実態を把握した上で個人としてできることを考えた。

(2) 生徒の意識

教師同様何らかの形で新聞に接している生徒が多いことが分かった。しかし、新聞のタイトルを「見る」こと、天気予報を「見る」ことが「読む」ことと考えているようである。

興味の方法性が、「国際」「教育」「福祉」「政治経済」に向かっている生徒が少ないこともあり、新聞から発信される情報を読み取ることができていない。そのことは、各教科の授業展開においても同様のことが言え、「意見を持たない」「発想力が弱い」「人任せにする」など仙美里中学校の直面する課題である。新聞から共通の課題を持たせ、考える場面を増やすことは、新たな刺激を生み出し、社会性を高めることにつながるのではないかと考えた。

(表3) 新聞に関する生徒向けアンケート (全校生徒)

	家庭で (平成19年4月実施)
読んでいるか	いる 80% いない 20%
どのような記事を	スポーツ、天気、地域 (上位3位)
どのように	見るだけ70% タイトルのみ10%
自由意見	<ul style="list-style-type: none"> ・広告が多い ・デタラメな記事も多い ・一番早くニュースを知る手だて

(3) 情報発信源の設置 (NIEコーナー)

本年度4月より本校2階多目的スペースに新聞(北海道新聞、十勝毎日新聞、朝日新聞)を自由に閲覧できるコーナーを設けた。新聞を取っていない家庭もあり、話題の共通化をはかる重要な拠点として考えている。

NIEコーナーには教師が注目する新聞記事を掲載し、生徒の意見、考えを述べるコーナーや、生徒が注目する新聞記事を掲示するスペースも併設している。話すことが苦手な生徒でも、書くことで気持ちを伝え、意外な考え方を発見できる機会となっている。4月初旬よりNIEコーナーで「新聞記事を読んだか」という統計をとっているが、徐々に読む回数や読む記事の幅が広がってきていることがうかがえる。

(十勝毎日新聞2007年11月5日号より)



(4) 新聞記事を読み取る

(表4) 新聞に関する生徒向けアンケート (全校生徒)

NIEコーナーを設置して、半年も過ぎると新聞を読むということに生徒の拒絶反応が少なくなってきた。(表4) 参照

10月を過ぎる頃には、4月当初では考えられないくらい新聞が生活の一部になっていた。多くの生徒が新聞を読んでおり、自分なりの意見をそこで感じることができてきたようである。

休み時間・放課後において「あの新聞記事読んだ」や「先生、あそこの国であんなことがあったんですよ」

などこちらが知らない情報を提供してくれる生徒も出てきた。ちょっとしたきっかけが生徒を変容させることがあると気づかされた。

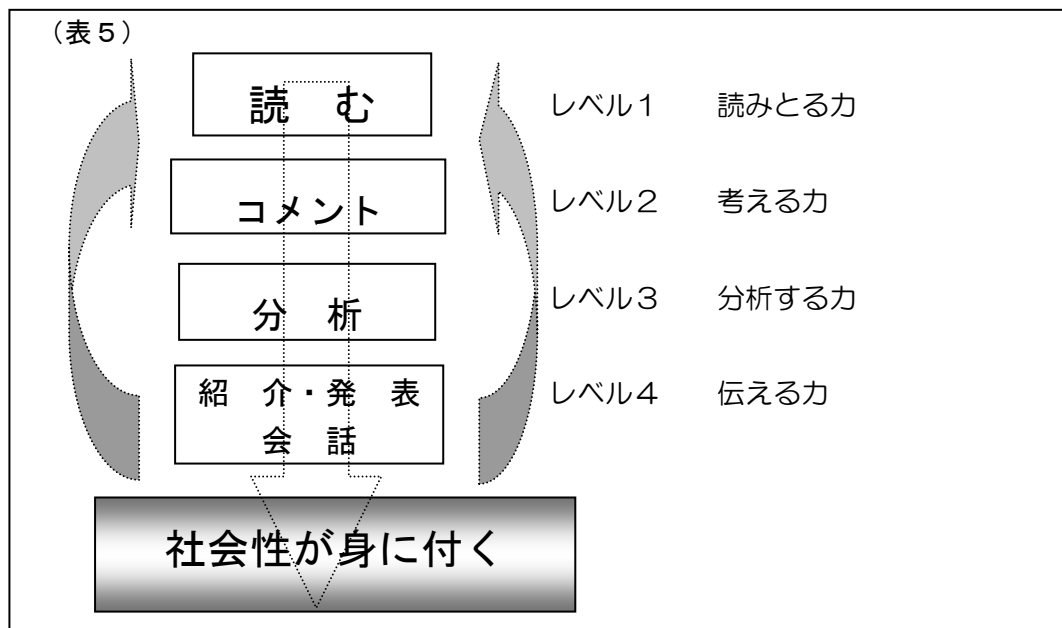
新たな新聞記事を使った取り組みとして、読む以外に3つの取り組みを生徒に提案した。ただ、取り組むだけでなく課題毎にポイントが付くというゲーム性を持たせた。(図参照)

NIEコーナーで	平成19年10月実施
読んでいるか	いる 80% いない 20%
どのような記事を	事件・事故、コラム、スポーツ
どのように	しっかり読む40% タイトル30% 見るだけ30%
自由意見	・家で新聞の話題が増えた ・賢くなった気がする ・友だちと新聞記事について話す

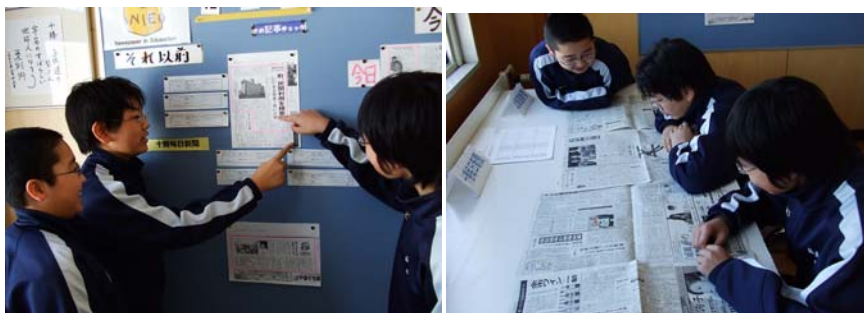


ア. 4つの取り組み

11月にかかる頃には生徒の「読む」という目標から「読み取る」という目標に変わってきた。ただ、生徒には個人差があり同一のものを提供するということが難しくなっていた。そこで今まで行っていた新聞を読むということレベル1と考え、更に3つの系統立てた課題を提供することにした。イメージ図としては(表5)の通りである。



レベル1
(読みとる力)



NIEコーナーにおいて様々な新聞に触れ、自分自身がどのようにその記事を読み、情報を得るかという力を養う。また、生徒の様々な意見に触れることにより多方向の意見を受け入れることができる。それが、「読みとる力」に結びつくのではないかな。

レベル2
(考える力)



生徒には「読みとる力」と同時に書くという作業を通じて「考える力」を身につけさせることにした。「考える力」の差に関係なく活動ができ、多くの生徒が自分の考えを自分の言葉でコメントしている。

レベル3 (分析する力)



新聞記事を分析する「ジャーナリスト」欄			
新聞社名 北海道新聞 平成19年10月30日 社会面 「仮病扱い、嫌がらせも」	タイトル (自分で作る)	分析内容	なぜ(どうして)それを言いたか
ポイント3 印	いつ	脳障害のある子に他の子がノートに落書きをしたり、石を投げたりしたとき	自分は障害のある子に嫌がらせをする子と傍観している子の立場で考えてみようと思ったからです。
	どこ	「いじめ」をされていた場所 ＝下校途中、クラスの中	人にいじめをすることは絶対してはいけないうことだと思いますが、もし自分のクラスにこのような子どもがいいたら、少なからず、かかってしまうとおもったからです。
	だれ	「いじめ」をした人たち	下校途中やクラスなどの少なからず人目につく場所でおきている「いじめ」に気づいてあげて、その「いじめ」を止めることは出来なかつたのかと思ったからです。
	なに	感じたこと	もう少し、障害のある子のことを理解して、その子どもに親の手を差し伸べることができなかつたのかと思ったからです。
		障害になってしまった子にはしっかりとした家庭環境も必要ですが、何より周りの人間、親は当然ですが、クラスの人をもっと理解してあげなければいけないと思いました。	クラスの人が助けてあげるのと「いじめ」をするのでは障害のある子の精神の状況は良い方にも悪い方にも大きく変わると思っています。
		次島期待分野は(国際) スポーツ 地域 教育 その他()	

ここの段階になると難しいと考える生徒が出てきた。しかし、STEP1では物足りなさを感じている生徒にとっては、やり甲斐のあるものと感じている。ここでは、新聞を自分自身で分析するという作業を行う。新聞を自ら「タイトル」や「いつ」「どこ」「だれ」「なに」最後に「感じたこと」を書く。

レベル4 (伝える力)



新聞記事を紹介する		「新聞記者」欄	ポイント2
自分の気になる新聞記事を自分の考えを述べ紹介する。			
新聞社名 北海道新聞 2ポイント印	記事名 平成20年1月28日 速さだ 「ゲーム機」の勉強	なぜ(理由)何を(知ってほしいこと) 厚くがなぜこの記事について書こうと思ったかという、最近、学校の授業などでゲーム機が使われているということが話題になっていたの、この記事について書いてみようとおもいました。 厚くは、ゲーム機は遊ぶもので勉強とは真逆のものと思っていました。それは、今まで学習用のゲームなどやったこともなく、自分の中で勉強とゲームは別のものという考え方が「常識」となっていたからだと思います。 ですが、この記事の著者の体験談を読んで考えが大きく変わりました。特に、厚くが書いたのは子どもがゲーム機で真剣に漢字の勉強をしているという事でした。そのゲームは漢字の書き順、さらにはしっかりとした楷書で正しいと正解にならないという人間勝負の採点方法だそうです。 ただ書いて、自分の採点する漢字ドリルと書き順まで注意してくれるゲーム、どちらが漢字の勉強に適しているか、誰の目にも明らかだと思います。 厚くは今回の記事でゲーム機は遊ぶためのだけのものという認識を改めて欲しいと思います。もはや、ゲーム機は使い方が次第では勉強をするための問題集、それ以上のものと言っても過言ではないのです。	
新聞記事(貼付)			
提出方法 乙戸まで用紙を取りに行き、随時提出する。			

ここでは単に情報を読み取るだけではなく、生徒自身が情報の発信者となり周りの仲間、教師に対して考えて欲しいことの「伝える力」を育成することを目的にしている。

更に、STEP 4の応用として“For Question Strategy”(上越教育大学 小林辰至)を使った授業を選択英語(全学年)で行った。“For Question Strategy”とは生徒が抱く疑問を「なぜ」「事実」「だろう」というように、生徒自身が仮説を立てていく技法である。

授業の流れ

1. ポイントを探す(5分)

本時の展開で使う、新聞記事をグループに配り、記事を読みながら教師の意図するポイントは何なのかを話し合う。

2. グループ内討議(15分)

教師が本時の展開で考えさせたいポイントを伝え For Question Strategy 用紙(右図)を配布し、それぞれのSTEP 毎の話し合いをさせる。

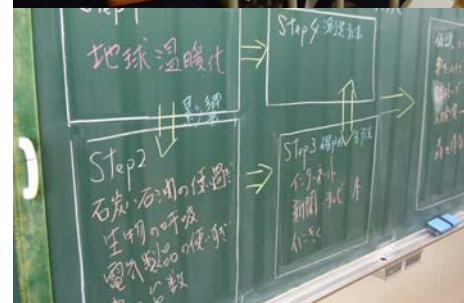
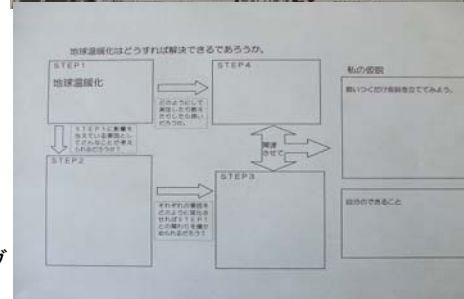
STEP 1 課題設定 STEP 2 影響 プレインストーミング
STEP 3 関係性 STEP 4 測定方法

3. 全体発表(15分)

グループ内で討議した内容を全体に発表する。
(異学年でグループを構成していることで、上級生が下級生に伝えるということができる)

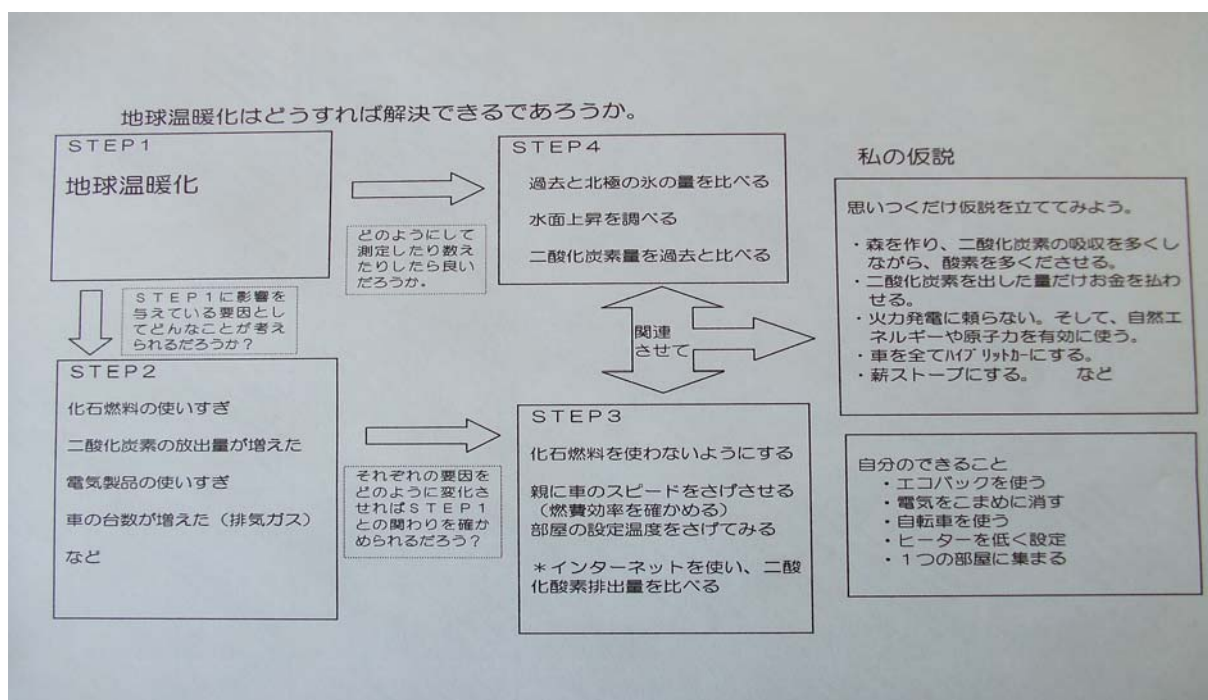
4. 仮説設定(10分)

全体発表をもとに仮説をたてる。
(STEP 1~STEP 4をもとにグループ全体で多くの仮説をたてさせる。)



5. まとめ（5分）

仮説をもとに自分たちに今なにができるか考える。



3. 成果と課題

社会性という言葉調べたところ 1. 集団をつくり他人とかかわって生活しようとする、人間の本能的性質・傾向。社交性。 2. 社会生活を重要視する傾向（大辞林より）と書いてあった。この目標を達成するために指導者として「新聞」という媒体を選び使うことにした。この1年間、生徒は指導者の気持ちを汲み取り、予想を上回る活動をしてくれた。新聞を読むのがやっとだった生徒が、記事の感想を書き、授業に参加するまでの変貌をみせてくれた。

生徒は大規模、小規模という学校規模に関係ない「教育の機会均等」を与える必要がある。教師が少し意識を変えるだけで劇的に生徒が変わるのだということが分かった。指導者としての「できない」という決めつけが、生徒の活動を抑えていたに違いないという反省が残った。

「新聞」には様々な情報が隠されている。教師のアンケートにもあったが、確かに「でたらめな記事」もあるかもしれない。それは、テレビ、本、インターネットにも同じことが言え、その情報を正確に伝えることは各教師のセンスにかかっている。

これからの課題としては、一個人としての「新聞教育」を各教科、特別活動、総合的な学習にいたる学校教育全体のものにしていかなければいけない。また、生徒はマンネリした活動を大変嫌う傾向にある。指導者として、「新聞」をどう料理するか今後も考えていかなければいけない。